

優秀賞

19代目を引き継ぐ僕へ 秋田県大仙市立大曲西中学校 3年 佐藤 誉士

ビデオカメラの画面越しに、僕は母を映している。収めなきゃ。ちゃんと収めたい。普段とは全く違う姿。しゃきしゃき動いたかと思えば、おっちょこちょいな姿を披露する母。だが、今画面の中の母は、赤のちはやに朱色の袴。頭には金色の天冠。セミが鳴く7月のお祭りにもかかわらず、お宮の中で父の隣に涼しげに座っている。

あれは僕が幼かった頃、祖母が身につけていた衣装。物心がついてから、7月の例大祭は、宮司姿の父と巫女舞を舞う祖母を玄関で見送るのがいつものことだった。開始時刻が近づくと、お手伝いに来てくださる5人の禰宜（ねぎ）さんたちと一緒に、美しい緑の中、父たちは7人1列になってお宮に向かう。

「ほら、たかちゃん。絵のようだよ。」

毎年のように感動していた母。太鼓が鳴り、花火が打ちあがるといよいよ祭りの始まりだ。お宮で舞う祖母を、母は境内からカメラで撮っていた。だが今年舞うのは祖母ではなく母。しかもビデオカメラで撮っているのは僕。初めて見る母の巫女姿。祖母の役割だった巫女を、今、確かに母が引き継いでいる。画面越しの母を追いかけながら、ずっと僕の中にあつた「いつも」の光景が、静かに動き始めているのを感じた。

僕の町内では昔から、例大祭前日に子どもみこしが行われている。小学生の頃は、毎年おみこしの楽しさを全身で味わっていたものだ。今年、母から声をかけられた。

「おみこしの担ぎ手の人数が一人足りなくてね。放課後手伝ってくれない。」と。部活を引退したばかりで、早く帰る放課後にまだまだ違和感があった僕。空欄になってしまった放課後のカレンダーに書き込めるものが見つかったような気がして、なんだかとても嬉しかった。頼まれた役割がある、そう思うと、帰り道のペダルをこぐパワーも、いつもとは比べものにならなかった。そのぐらい僕ははりきっていた。おみこしに参加するなんて久しぶり。3年ぶりか。あのときのような、おみこしの楽しさに出会えるにちがいない、そう信じていた。

小学生の頃は、最初から最後まで楽しいことだらけ、それがおみこしのすべてだった。大人がどんな動きをしていたかなんて、何一つ気にしたことなどない。しかし、この夏の僕は違った。おみこしの4分の1の重さを担当しながら、

おみこしだけではない重さを全身で味わう僕がいたのだ。3人のお父さんたちとのリズムがそろそろように気を配る。休憩のたびに、熱中症対策やコロナ対策をするお母さんたち。沿道には、久しぶりのおみこしを嬉しそうに待っている地域の方たちがいる。今まで見えなかったものが見え始めた今年。おみこしを終えた僕は、

「誉士君、すごく助かったよ。ありがとう。」

とねぎらいの言葉もいただいた。小学生なら

「暑い中、よくがんばったね。」

の言葉だったのに。言葉も今年は変わったのだ。「いつも」のおみこしのつもりで手伝いをしたはずだったが、僕には初めての景色と初めての気持ちが広がる経験になった。

僕の家は代々宮司を務めている。神前の部屋には、祖父をはじめ宮司の格好をしたご先祖様の写真が飾られている。小さい頃から見慣れた風景だ。将来僕も継いでいくのだろうと思ってはいたものの、それは14歳の僕には、もっともっと先の「いつか」のことだった。

毎年行われている例大祭も、ここ数年は平日開催。登校日だった僕には、父と祖母のいる例大祭で止まっていた。祖父が亡くなり、父が宮司を引き継いだ。母に巫女舞を教えた年、祖母も亡くなった。幼かった頃のまま止まっていた例大祭は、新たな光景に書き換えられて動き出した。大人の手伝いのために特別に参加したおみこし、そして自分の目で見た母の巫女姿。二つの体験により、僕の中の「いつも」同じだった場面は動き出し、「いつか」考えようと思っていた未来は、大きく自分に近づいたように思う。家や地域の伝統は引き継がねばならないものという考えから、伝統を引き継いでいくことはすてきで嬉しいこと、大事に紡がれてきたものを喜んで引き継いでみたい、そう考えるようになった僕がここにいる。ぼんやりとした「いつか」だった自分の未来を今確かに感じ始めている。

妹は、母の巫女の練習風景を興味津々で見つめている。気がつくとも、母と一緒に妹まで歌っているではないか。なんだか先を越された気持ちと同時に、なかなかやるなと誇らしい気持ちにもなった。

「そうかそうか。たかちゃんが19代目か。」

と目を細めてだっこしていたという祖父。僕は神前の祖父の写真にそっとつぶやいた。

「おじいちゃん、おばあちゃん。僕も妹も二人みたいになりたいな。なってみせるね。」